

クローズアップ

NGO・NPO

特定非営利活動法人

フー太郎の森基金 心に緑の種をまこう

みんなが持てる力を出し合った

東北の小さな町相馬市で、フー太郎の森基金が誕生して一〇年が過ぎた。アフリカの水問題を木を植えることから解決していこうと一九九九年九月に私が創設したが、始まりは発起人も発足式もなく、たった一人でのスタートだった。「こんなことを一人で始めるバカなやつがいるのか」と、次第に周りに支援者が増えてきた。

そのひとつが全国キャンペーンだ。活動に年間三〇〇万円のお金があると分かった時、どうしたものかと思ったが、「三〇〇〇人から一〇〇〇円をいただければいいのだ」と考え直した。それならば、座っていてもお金が集まらない、全国を遊説して歩こうと高知県から青森県まで四五日間、四一カ所を巡るキャンペーンを行った。

私はそれまで市民活動にほとんどなじみがなかったのだが、全国を巡りながら面白いことに気付かされた。会の主催をしてくれる環境や海外協力などの市民活動に携わる人達は、日本の中では実は決して有名な〇〇さんというわけではない。しかし、どなたもタンポポのようにしっかりと地面に根を張って美しく、しかもこの人達が全国でつながっているのだった。「へえ、あなたも△△さんの知り合いなの？」といったことが、全国で聞かれるのだった。

いやはや世間は狭い。否、何というネットワークだろう！日本中で志を同じくする

人々が、地下水脈のようにみんなつながっていたのだ。これに気付いた私はすっかり感動してしまっただし、また自分がそのネットワークの一員に加えてもらえたことがとてもうれしかった。私達の「つながり」は、個人と個人が緩やかにつながる場、「共感できる場」なのだろう。普段はお互い別々な目的のために活動していても、今差し迫った問題のために共に手を携える。私達はただ響き合えばよかったのだ。

そして四五日後、私は三五〇万円の支援金を皆さんからいただき、間もなくエチオピアの世界遺産の村ラリベラで、木を植える活動が始まっていった。

子ども達の心に種をまく教育

私達はお金と人を投入して公共事業的に大量の木を植えるよりも、教育に重点を置いた緑化を行っている。というのも、ラリベラの人々が森の大切さを理解しなければ、いくら木を植えてもまた切って終わりにになってしまうからだ。実はそんな悲しい事例も他所でいくつも目にしてきた。

そこで、学校に環境クラブを作って、子ども達と一緒に種から苗木を育て植



↑ラリベラのギオルギス教会

(特活) フー太郎の森基金

〒976-0022 福島県相馬市尾浜字南ノ入241-3 TEL & FAX 0244-38-7820

e-mail: futaro@bb.soma.or.jp URL: www.bb.soma.or.jp/~futaro/

林をする活動を始めたが、現在では一〇〇〇人ほどの子どもがクラブに参加している。他にも年一回、学校で環境劇を上演する。それから各学校で環境をテーマに絵や詩、作文を募集する環境コンテストも行っている。

また、環境教育ノートを作って配布している。これは中身は何の変哲もない大学ノートだが、表紙に工夫がある。まず表の扉には環境クラブの優秀な子どもたちの写真を載せる。タイトルは「Greener Cleaner Landia (緑できれいなフリベラにしよう)」だ。ページをめくると表紙の見返しには、「なぜ森が大切なのか」を教えるイラストと英語と現地語の解説。裏の見返しは「なぜ村をきれいにするのか」だ。そして裏表紙には環境コンテストで優勝した絵を掲載した。実はフリベラの子も達にとってノートは特別な意味がある。子ども達は新学期が始まる前、ノートを用意しなければならぬが、貧しい家の子はなかなかノートをそろえてもらえない。やおら、観光客に張り付けておねだりする。それならという事で、私達はオリジナルのノートを作り、植林を終えた子ども達にあげるようにした。これをもらった子ども達は一年間このノートを使いながら、森の大切さを理解するようになるというわけだ。

乾いた大地に希望を植えようよ

日本は一日一人当たり二五〇ℓの水を使っているそうだが、フリベラでは一人何ℓの水

を使うことができるだろうか？ 答えは、わずか二ℓ。「まさかー」、そんな風に叫びたくなる数字だ。しかも毎日水がくるわけではなく、普段は三日に一回三〜四時間。乾季のひどい時期になると、一週間に一回一時間くらいしか水が出ない。おまけに世界中からやってくる年間五万人の旅行者と、この貴重な水を分け合わなければならない。

そんなことから私達は「JICA草の根技術協力事業・パートナー型」の資金で、雨季に降る雨水を貯める溜池を、住民参加で八つ掘った。直径が三〇〜六〇mで、雨季後三〜六カ月水が使えるようだ。また、溜池周辺から緑地帯を作っている。その他、水不足解消のために二〇〇五年よりフリベラの水源地カンカニでの植林を開始した。三二〇〇mと高地だが、地元住民が植林に協力的なおかげで、活着率は八割近くと好調だ。

今後の問題は、植林する土地をどう確保していくかだ。カンカニ周辺は、高地にもかかわらず、平坦なところは畑に利用され、斜面も段々畑、または放牧地になっている。家畜の放牧は子どもの仕事になっていること



↑山の斜面のマイクロキャッチメント。1本ごと石で受け皿を作って植林する



↑子ども達が裸地を緑化した

が多く、あらゆる場所に家畜を放牧している。だから草や木の成長を待つことができず、どんどん裸山になってしまうのだ。

よって、植林地を確保するためには、放牧地を有効に使っていく必要がある。例えば、山を三分割して、一年ずつ放牧する場所を回し、草や木が自然に回復するのを待つよう指導したり、村の共有地に牧草を導入し、限られた地域で家畜を養えるよう試みなければならないだろう。

こうして私達は素人ながら試行錯誤を繰り返して、これまで三五万本の木を植えてきた(活着率六八%)。また、毎年継続している全国キャンペーンも、昨年夏で一七六カ所になり、ついに全県踏破を完了した。これからも私達は支援者の皆さんと乾いた大地に一本ずつ木を植えていくことだろう。なお、フー太郎の森基金の一〇年の軌跡が、「よみがえれフー太郎の森 エチオピアに希望を植えよう」(東京新聞)という本にまとまり、春に刊行される。売り上げの一部もフリベラの森作りに利用されるので、皆さんもどうぞご参加ください。

〈文責〉NPO法人フー太郎の森基金理事長

新妻 香織



↑ペットボトルで点滴灌水を試みる子ども達